

〈研究論文〉

太平天国の戦況と長崎  
The Influence of the Taiping Heavenly War on Nagasaki  
—唐人たちの苦難—  
The hardships of the Tang people

松尾 晋一\*  
Shinichi MATSUO

はじめに

太平天国の乱は中国国内の物流だけではなく、国際貿易にも影響を及ぼした。たとえば「琉球」を通じた太平天国情報を分析した真栄平房昭の成果によると、琉球の貿易活動は深刻な影響を被って、この知らせを受けた島津斉彬は琉球の対中国貿易の先行きを危惧していたという<sup>1</sup>。また、対馬の宗家には、中朝間の貿易が滞る状況が伝わって、対馬にも影響する可能性を危惧するとともに、これらの情報を幕府へ伝えていた<sup>2</sup>。そして長崎は、嘉永5年（1852）12月以降同7年7月まで唐船の来航がないといった事態にも陥った<sup>3</sup>。太平天国の乱は経済の面でも日本に影響を与えたいことは明らかである。

本稿ではこのうち長崎に注目する。太平天国の乱と長崎との関係は松浦章の研究があり、唐船がもたらした情報や日清間の貿易活動の実態に与えた影響などを明らかにした<sup>4</sup>。具体的には、幕府が海外情報入手先として唐船を重視していたものの、太平天国に関する情報が期待したほど入手できなかった理由が、日中貿易の拠点であった乍甫への主要な物資供給地である蘇州が太平天国軍の攻撃を受けてたからだと指摘

した。また、文久期唐船の長崎来航がないなかで、上海からのイギリス船二艘が日中貿易を担っていたことも明らかにした。これらは極めて重要な指摘であるものの、太平天国の存在を通じた分析を行ったわけではなく断片的な解明に留まっており、事実確認もふくめ検討の余地が残っている。

そこで本稿では、太平天国のどういった情報が情報集積地の長崎に集まって、唐人社会に影響を与えたのか改めて確認していく。太平天国は十年を超えて存在したわけで長崎に対する影響の度合いにも変化があったことは容易に予想できることから、この点に注意を払う。また、従来の研究では日中間の貿易における日本側について長崎のみを対象に考えてきた傾向が強く、そして、太平天国の情報は対馬、琉球などからも長崎へ伝わって来たにもかかわらず、情報源をふまえてこなかった印象を持つことから、これらも意識して述べていく。

\*長崎県立大学地域創造学部教授

## 一 大陸の動乱情報と長崎唐人社会

### ・海外情報の集散地としての長崎

市古宙三によると<sup>5</sup>、唐船によってはじめて太平天国に関する情報が日本に伝わったのは、嘉永5年12月のことだった。その情報は天徳の年号を称する明裔朱氏の明朝回復を志す運動であるが、真の明裔ではなく偽称して乱を企てた賊でいずれ滅亡するだろうと、楽観的な見方をしたものにすぎなかった。

当時の長崎における情報の取り扱い状況は翌年のものになるが、嘉永6年10月27日付で岡藩御用達石本卯之助が草刈敬輔・武藤章蔵に送った書状からわかる。すなわちそこには、「一、一昨年以來、唐国江明代之餘類起り立、及騒動候一件、宗対馬守方朝鮮国江詰方之役人御承之趣、九月中別紙之通御同家江御届相成申候、右は、去冬入津之唐人共、内々風説申居候儀ニ御座候へ共、当表江渡來の唐船仕出方、乍甫と申候所方、遠境之趣にて、駈と不及取留、其上、表向申立候儀ニも無御座候處、其後追々騒亂及增長候儀と奉存候、此段御含迄申上候」と書かれていた。これによると、対馬宗家から朝鮮から得た情報として明代の殘党の末裔が騒動を起こしていると伝わったことがわかる。ただ、長崎では昨冬（嘉永5）に唐人が風説として話題になっていたものの、長崎に向かう商船の出航地である乍甫から遠く離れた地域での出来事であり、正式に長崎奉行所へ申し出ることにはなかったというのである。この後、唐船は翌々年（安政元年）7月26日まで来航がなく<sup>6</sup>、対馬、そして琉球からの情報がこの間長崎に伝わってきた<sup>7</sup>。

石本卯之助の同年11月28日付で古田右馬允に送った書状には、「一、唐国も一昨年来、明代餘恢復を名として、一揆起立候處、当春以來別て盛ニ相成、不容易騒動之よし、朝鮮・琉球兩

国立風聞、追々承及申候、定て御承知之儀とは奉存候、是以、往々皇国之患共ニは無之哉、誠ニ以苦々敷次第御座候」とある。長崎においては、朝鮮そして琉球からの情報で事態が大きくなっていることを知り、日本の患いになるのではと疑念を抱き、そのことに苦々しさといった感情を持つ者がでてくる段階にまでなっていたことがこれからわかる。

以上から、長崎への唐船・オランダ船の来航が途絶えたなかでも対馬・琉球から海外情報が伝わる環境に長崎があったこと、そして集積された情報が各地へ伝えられる発信地として長崎が機能していたことが確認できる。

幕府の出先機関である長崎奉行所は、本来なら来航した唐船、そしてオランダ船から海外情報をいち早く、そして他とは異なる情報量を得られる環境にあったものの、ことこの段階では太平天国に関する情報について他のルートから得ていたのであった。ただしこれは、長崎が幕府の出先機関として機能しなかったことを意味するわけではない。各方面から情報が長崎奉行所に集まり、そしてそこを拠点に周辺大名間で情報を共有していた事実をふまえるとハブとしては機能できていたことになろう。

### ・長崎在留唐人の動揺

前節で確認した長崎の情報環境にもっとも影響を受けたのは唐人だった<sup>8</sup>。唐船の来航が途絶えており、長崎でロシアのプチャーチンと交渉した川路聖謨は、日記（嘉永7年正月14日）に「この節は夏船・冬船共に来らざる故に、帰ること能わず。其上故郷は戦争のちまたと成り、日日合戦やむ時なしなど聞ゆれば、哀しみて、日ごとに関帝堂みくじをとり、或は泣き、或は色を直して死する如くなり居るよし也。砂糖其外共に遣い切りて、みな市中より買上なり

と承る。唐人共貧相なるけしき、亡国の民となれば、相までもよからぬにや。」と記している。故郷が戦争状態にあって、不安を抱えた唐人たちの様子が、川路の目に入った。川路は、「亡国の民」となれば人は人相まで変わるとこの時認識したのである<sup>9</sup>。

こうしたなか、嘉永7年2月十二家在留船主江星棠・楊少畚が長崎会所年行司へ、家族の安否確認のために船の貸与を願い出たのである<sup>10</sup>。すなわち嘉永5年の冬に長崎へ向かう際、江西地方で賊徒が騒乱を起こした風聞があったので、その後江南の蘇州辺りまで騒ぎ長崎への船が仕立てられないのではないかと懸念したことによる。もちろん中国の家族の生存も、彼らにとっては気がかりであったはずである。

実は、対岸でも長崎との貿易に依存していた商人は同様の状況にあったようで動きがあった。長崎と貿易を続けないと死活問題だから、乍甫から二隻の船が長崎を目指したのである。一隻は嘉永7年7月10日に出船して7月22日長崎に到着した。もう一隻は同月15日に船を出して同月27日長崎に辿り着き<sup>11</sup>、これで在長崎の唐人も一息付けたのであった。一艘目は橋湾に面する茂木村沖へ最初に辿り着いたが、その時得た大陸の様子が7月22日付の震八から五島家への書状でわかる<sup>12</sup>。そこには、「去春四艘共無滞五月末着唐、正月二月頃廣西逆党江南江乱入、南京・鎮江・揚州之城三ヶ所ヲ失ひ蘇州之居民方々江逃散、又ハ八月頃上海道一揆起り江南江官軍大勢集り防禦有之、商売筋往来打絶申候、仍而昨夏昨冬仕出方出来不申候、当時ニ而者追々賊勢衰諸方江逃去申候、本船七月十日乍甫方仕出、跡船一艘者十五六日頃仕出候積ニ御座候、右豊利船方差出候書簡大意ニ御座候」と書かれている。

これによると、昨年(嘉永6年)の正月・2月頃に広西の

逆党が江南へ乱入して南京・鎮江・揚州へ攻め入り落城させ、蘇州の人は方々へ逃散した。その後八月に至り、上海で一揆が起こり江南へ官軍が集まりこれを防御した。そのため物流は途絶えた。これによって昨夏、昨冬に長崎へ船が出せなかったことがわかる。後に賊勢力(太平天国軍)が衰えて諸方へ逃げ去ったことで7月10日に乍甫から一艘だし、もう一艘が15・6日にでたことがわかる。

この時の二艘の唐船が伝えた蘇州辺りでの風聞から太平天国の外、小刀會をはじめ全国各地で一揆などが起こり中国大陸の混戦が続いていることを長崎、そして日本が知ることになった。これを報告した王氏江星棠・十二家船主楊少畚は最後に、「此後如何成行可申哉、何れ茂懸念罷在申候」と記していて、今後への不安が払拭できていない心のうちを長崎奉行所へ伝えたのである<sup>13</sup>。

これが的中したのか、この後一年間長崎への唐船の来航はなかった。この間、日向に唐船が漂着して大陸及び中国沿岸の情報を知ることができたが、尋問にあたった江星棠・楊少畚は、漂着民から聞き取った内容の後に、「前条之次第を以相考仕候へ者、一舨海陸共不穩時節、諸荷物運送出来兼、終ニハ昨冬も商売相休候義者無之哉、万里外ニて同国之者ニ出会候ても故郷之人ニ無之私共商売筋ニおいて者委敷相分り兼、実以心痛至り、乍憚御憐察可被成下候」と記した<sup>14</sup>。すなわちこの二人は、海陸ともに不穩な状況に物流が麻痺し、この結果昨冬も商売が滞ったのではないかと、同国人に出会っても自分たちの商売の詳細は知れず、心痛だとの思いを伝えており、自分たちを思いやってくれんではほしい、とまで書き記したのであった。

長崎にいた唐人がここまで書くことは、通常ない。先が読めないなかで、追い込まれていた

心のうちを長崎奉行にぶつけたと考えたい。長崎の唐人はここまで窮地に立たされていたのであった。

## 二 河南エリアの戦況と日中貿易体制

### ・唐船・オランダ船がもたらした中国情報

安政期の長崎への唐船来航数は、元年(1854)2年がそれぞれ2隻、3年が3隻、4年が4隻、5年が1隻、6年(1860)が3隻といった状況であった<sup>15</sup>。一方、オランダ船は年一艘来航した。このほか、日本に漂着した唐人から得られた情報も含め、以下では長崎で得られた太平天国関係の情報を確認していく。

安政2年(1855)4月に江星棠・楊少延から長崎奉行に提出された「清国騒乱」は日向国に漂着した唐人の口書で、「唐国騒乱之模様委く相尋候処、昨春北京近く押寄候洪秀全之余党、蒙古之精兵等も支、又々散乱致し、所々乱妨におよひ候者誅被致候」<sup>16</sup>とある。これによって、清軍が北伐軍を討伐していることがわかる。しかし安政2年(1855)7月のオランダ商館長が提出した「別段風説書」には、安政元年頃の風説として「一分国過半は滅し北京と南方との通路を絶切申候、右之事勢は興廢の場尔有之満州韃靼の柄権無覚東勢尔有之候」とある<sup>17</sup>。これからは北伐軍の優勢がわかり、清の権勢が覚束ないとの認識を持たれるほどの状況が伝わった。「清国騒乱」が最新の情報と知りつつも、異なる情報が前後して長崎に入ってきたので、戦況の判断をしかねる状況がまだまだ続いていたと思われる。

この翌年に来航した唐船のうち、二番、三番船がそれぞれ知らせた現地の状況は、南京・鎮江といった長江の水運の拠点を太平軍が支配しているために産物の輸送に支障がでて、高値に

なっているといたったものだった<sup>18</sup>。ここから唐船による長崎貿易の維持にも支障がでてくと長崎でも判断されたのであろう。

その後の安政3年7月付の「別段風説書」によると、安政2年5、6月頃の情報として、沿岸部では海賊行為が収束しないが、中国南方の騒乱は治まっているようにみえたとあって<sup>19</sup>、事態の改善に期待したくなる知らせが入った。つづく安政4年(1857)2月付の「唐国賊乱之模様」にも「紅巾之賊乱、道光之末ニ起り、此節迄数箇年之間、戦戮相加里候儀ニ付、最早十分之内七八分ハ平定相成申候」<sup>20</sup>とあって、大陸の状況も落ち着くとの見通しを長崎でもしたに違いない。

だが、同月20日に唐船が入港した後安政5年7月29日まで唐船(南京船)の来航はなかった。この間、長崎に情報をもたらしたのがオランダ船で、安政4年11月に「別段風説書」が作成された。これはアロー戦争がはじまったことを日本へ最初に伝えたもので、朝鮮が開港したこともふれている。そこには「土寇」の首長と訳された洪秀全に近頃3万人の援軍が集まり、支配領域を拡大し、最新の情報でもその勢いが衰えてない状況が記されていた<sup>21</sup>。つづく同5年正月に作成された「別段風説書」も、先の情報と同様の内容だった。

これらの情報からは掴めない賊と扱われた太平天国の支配領域拡大に関する情報が、1年8カ月ぶりに長崎に来航した唐船から伝わった。この船によると、昨年までに清軍が鎮江城を取り囲み奪い返して南京城も同様の作戦をとった。つづけて6月に福建・浙江両省は「穩ニ相成居候得共、自今変遷之有無難計奉存候、右ニ付諸方之商人外出不致、今以南北不通ニ有之候間蘇州交易之場所倍不景気ニ而只今之模様ニ而ハ、幾時頃流通可致哉無足非次第ニ奉存候」<sup>22</sup>



と、現地の状況を伝えている。長崎へ唐船がこの間来なかった理由などは、ここに記されている通りで、太平天国軍と清軍の攻防が福建・浙江省の経済活動を停滞させて対日貿易に大きな影響を及ぼしていたのである。この後さらに長崎は大きな影響を受けることになる。

・唐船貿易体制の崩壊と琉球産物の長崎商法の継続

1860年4月、太平天国軍は蘇州に攻め入り占領した。これによって在留唐人程稼堂の妻子が長崎へ避難したのである。同年5月25日付の「此度唐国賊乱のため蘇州落城致し、私妻子共難を避ヶ御当地ニ逃来候ニ付、右之模様略左ニ申上候」<sup>23</sup>に詳細が記されている。これは太平軍が蘇州進出を日本にはじめて伝えたものと考えられているが<sup>24</sup>、それによると4月4日に蘇州が取り囲まれ、同月13日には巡撫が殺害され、これで城門が開き落城に至ったという。同15日まで殺害が続いた。

また、同月14日十二家宏豊船が乍甫へ着いたものの土匪が放棄して積み荷を載せたまま寧波へ逃れ、王氏吉利ならびに吉隆船は同15日に上海近郊の呉淞に着船したが、上海の諸問屋はいずれも門戸を閉めて荷物の引請手がない状況であったことまで伝わった。この書付に程は、「情景聞ニも不忍事計ニ而、筆紙ニ難申尽候」と書いている。これは単に故郷の惨状を憂いて書いたわけではなく、従来の貿易体制が崩壊して、先行きへの見通しも立たない不安の表現であったと思われる<sup>25</sup>。

程の妻子が長崎に逃れた際に乗船した船を特定することはできないが、唐船以外の船であった。つぎの史料は松浦章が紹介したことのある文久元年（1861）11月付の長崎奉行高橋和貴への上申書である<sup>26</sup>（下線は筆者による）。

長崎表在留罷候唐船主鈕春杉之工社陳

志家族四人、同船主稼堂之総代鄧増弟家族男女十一人、同船主楊少畚家族四人、同船鈕春杉之工社陳英家族男女七人、追々亜米利加船、英吉利船にて便乞渡来仕候ニ付、入館之儀、船主共より願出候間、相糺候処、何れも唐国賊乱未静謐不相成ニ付、親族を慕ひ當港迄罷越候ニて、事実進退相糺り、一方之活路を求め遙かに渡来仕り入館願立候段者、無余儀次第に相聞え、尤當三月中申上置候唐船主鈕春杉弟嫁其外之者同様之事柄ニて渡来仕候節、入館為仕候振合も有之候間、此度も承届入館為仕置候申候、依之船主共差出候願書和解四通相添、有馬帯刀申談此段申上候、以上、

これから太平天国の蘇州進出の影響で長崎の唐人貿易関係者やその家族が日本へ渡来してきたことがわかる、と松浦は指摘した。改めてこの史料で注目したいのは、同年3月に「唐船主鈕春杉弟嫁其外之者」が唐人屋敷に入ることを長崎奉行に申し出て許されていた点である。この事例は、程の妻子が日本に逃れた後の最初の例であると推測される。

これを先例に今回長崎奉行に対して26名の唐館への受け入れを願っているわけだが、この時期に唐船が長崎には来航しておらず、短期間に大陸からの避難民が長崎を訪れたわけではなかった。小人数がこの史料にも記載のあるアメリカ船やイギリス船といった外国船を利用して段階的に長崎へ訪れたのであった。長崎奉行高橋は大目付・目付に届けたようで、一連の届はその後、外国奉行が同年11月11日、勘定奉行・勘定吟味役が同月中に確認していることがわかる<sup>27</sup>。これに幕府がどう応えたのか知れる史料は現在見つかっていないが、『バタヒヤ新聞』（巻22 文久元年辛酉10月11日）には、「近頃衰へし南京の賊は此禅代に乗じて再び意を得たり。

当今寧波は賊に劫かされ、其土地の民人散乱し、自然と交易も止にけり」とあることから、幕閣も複数の情報から中国大陸の実状を把握していたことは間違いない。現状を容認せざるをえなかったからこそ、避難民が長崎に滞在していたものと思われる。

こうした大陸からの避難者のなかには、画人王克三、徐雨亭、陳子逸などもいて、長崎在留唐人との親族関係にないものたちもいた。彼らは日本の文人たちとの交流を深め長崎滞在は数年に及び、王克三の場合は慶応元年（1865）3月から5月ごろに帰国したとみられている。避難民の帰国は、大陸の情勢と無関係に行われた。

以上のように、太平天国の影響で既存の長崎貿易を維持できる状況にはなく、太平軍の蘇州進出が唐人の家族の生命を危険にさらし、その避難場所として長崎が選択された。日本への渡航の実現にアメリカ船、イギリス船が協力して、また日本側も状況を理解し避難民の受け入れを許して彼らを保護したのであった。琉球や対馬、そして他の開港地とは違い、長崎の場合は太平天国の勢力拡大が唐船貿易体制を崩壊させ長崎の唐人社会に直接的に影響を与えていたのであった。

この状況下長崎貿易に従事していた長崎在留船主はイギリス船を利用した上海貿易に活路を見だし、唐船主は唐華商になった<sup>30</sup>。とは言っても、文久2年（1862）2月18日付で長崎の通詞によって訳された「上海新聞」には、「一、<sup>(上海)</sup>当港及近隣之各港ニおゐて外国之貿易は、当時殊更繁昌ニ可相及処、去ル第一月二十二日之風聞ニ而、長髪之賊徒等当港を侵犯し、外国の商人及土地之商人差別なく、其荷物を奪ひ取不法を相働きし故、衆人の難儀少からず、遂に商売も不景気になれり」<sup>31</sup>とあって、唐人による長

崎貿易の改善は困難を擁したのであった。この状況は長崎奉行にとっても悩みの種だった。つまり長崎会所が危機的状況だったのである。

ところで琉球も長崎と同様に太平天国の影響を受けて清との貿易は不振であった。この状況下の島津家の対応について注目した上原兼善によると<sup>32</sup>、島津家が目をつけたのが、唐船の来航が減少して薬種類の輸入量が落ち込んでいた長崎であった。斉彬は老中阿部正弘との交渉でさらに五年間の延長を勝ち取り、一時的に利益をあげた。ただ、オランダ船の貿易活動の活性化や太平天国の影響などで思うようにいかない時もあった。

文久2年7月に島津家は琉球国御救助を理由に唐船の来航に関して幕府に申し立ての書付を送ったものの、期限がせまっていた琉球産物の長崎商法のみがこの時許されている<sup>33</sup>。島津家の立場に立つと、琉球の唐船貿易を維持するためには、旧態依然の福建—琉球—長崎の交易ルート<sup>34</sup>の存続が重要と判断したのであろう。一方長崎奉行にとって、開港以後長崎会所存続の基礎となっていた日中貿易を独占<sup>34</sup>することの意義が、先述の状況ではほぼ成り立たなかった。そのうえ五カ国への俵物輸出を幕府が黙認したこともあって唐人の俵物貿易の独占は崩壊しており、何とか会所を存続させようとしていた長崎奉行にとって島津家の申し出は、拒否する理由がなかったのである。

この動きは、太平天国の動向が単に長崎の唐人社会に影響しただけではなく、既存の長崎における貿易体制に少なからず影響を与えたことの証左であり、日中間の唐船貿易という枠組みに影響があったことを明らかにしている。

## おわりに

太平天国の戦況のふたつの情報が日本の現実的な政治、政策に影響を及ぼした。つまり太平天国の北伐軍が北京に迫ったことと、日本向け唐船貿易の拠点およびその周辺の経済圏を占領したことである。

前者は清が倒れ日本周辺の国際関係が現状変更する事態を想定せざるをえない情報であった、日本が外交方針を転換して間もない時期と重なってさらなる現状変更への不安と幕府が認識するに至った。海外情報の入手の拠点である対馬、長崎、薩摩、そして幕府がそれぞれの立場で積極的に情報を得ようと動いたところは特徴的である。一方後者は、太平天国の戦況がより具体的、直接的に日本の経済活動に影響した段階で、江南エリアの事象だったこともあり、長崎、薩摩・琉球の問題となった。つまり、対馬には情報が入らず、幕府は積極的にこの件に関する情報収集を行わなかった。この時期幕府は、まさしく内憂外患の状況にあったが、具体的な貿易政策への対応など積極的に試みることはなかった。この理由は欧米との修好通商条約の締結があって新たな日中貿易体制が機能していたからである。

以上の状況下の長崎は本文で述べた通りであるが、一点強調しておきたいのは、太平天国軍が蘇州を落城させて以降長崎の既存の唐人社会は大陸からの避難民を受け入れ、従来の貿易体制崩壊を受け入れ生き残りをかけて動いたのであった<sup>35</sup>。長崎の近世的な唐人社会は、太平天国の乱の影響によって崩壊したとの理解も許されよう<sup>36</sup>。

## 注

- 1 真栄平房昭「幕末期の海外情報と琉球—太平天国の乱を中心に—」（地方史研究協議会編『琉球・沖縄：その歴史と日本史像』雄山閣、1987年）。
- 2 拙著「対馬宗家が得た太平天国の戦況情報と日本の対応」（中野等編『中近世西国・九州史研究』吉川弘文館、2024年）。
- 3 『唐船進港回棹録・島原本唐人風説書・割符留帳—近世日中交渉史料集—』（関西大学東西学術研究所、1974年）16・17頁。
- 4 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』（思文閣出版、2007年）第六編第一章、同『海外情報からみる東アジア 唐船風説書の世界』（清文堂、2009年）第四編第四章。
- 5 「幕末日本人の太平天国に関する知識」同『近代中国の政治の社会』東京大学出版会、1971年、VI（初出1952年）。
- 6 前掲『唐船進港回棹録・島原本唐人風説書・割符留帳—近世日中交渉史料集—』16・17頁。
- 7 前掲拙著「対馬宗家が得た太平天国の戦況情報と日本の対応」。
- 8 嘉永四年以来唐船の長崎来航がなかったため貿易に従事する人々も苦しい状況にあった。そのため身分に応じて会所銀を原資として町乙名を通じて無利息で貸与（返済は10ヶ年）する対応がとられた。（岩田みゆき「幕末期における長崎貿易商人の海外情報—巨智部忠陽（『青山史学』第39号、2021年））。
- 9 川路聖謨著、藤井貞文・川田貞夫校訂『長崎日記・下田日記』平凡社、1968年108・109頁。
- 10 1854（嘉永7）年2月「二月長崎在留唐船主願長崎会所年行事へ船借受帰国の件」（『大日本古文書 幕末外国関係文書之五』東京大学出版会、1984年、379・380頁）。
- 11 『大日本古文書 幕末外国関係文書之七』（東京大学出版会、1984年）99頁。
- 12 「風説袋」長崎歴史文化博物館収蔵、青方14 13。
- 13 前掲『大日本古文書 幕末外国関係文書之七』301～305頁。前掲「風説袋」にも、有。ところで、この年はペリーが浦賀へ、プチャーチンが長崎へそれぞれ来航した。長崎にあった岡藩御用達石本卯之助は嘉永6年（1853）について同藩古田右馬允へ、「誠二当年は、東西之異船騒動にて、京拱も至て不景氣之由、追々承知仕諸国とも同様之事と只管歎息仕候」と書き送っている（『石本卯之助書翰—豊後岡藩御用達書簡—』（別府大学付属博物館、1991年、69頁））。プチャーチンの長崎来航とペリーの浦賀来航で国内は動揺していて京・大坂もひどく不景氣であるという。時間が経つにつれて事情を知れた諸国も同様の様子でひたすら歎息した、と岡藩へ伝えたのであった。長崎だけが不景氣ではなく、日

- 本の東西かかわりなく全域が不景気とあって、石本卯之助も将来を見通せない現状への不安を吐露したのであろう。この時期長崎で商売に携わる人は日本人であろうと、唐人であろうと理由はともあれ、大なり、小なり不安を抱えていたのである。
- 14 卯月18日付前掲「風説袋」。
- 15 前掲『唐船進港回棹録・島原本唐人風説書・割符留帳—近世日中交渉史料集—』17頁。
- 16 『大日本古文書 幕末外国関係文書之十一』（東京帝国大学、1919年）168～169頁。前掲「風説袋」、前掲『石本卯之助書翰—豊後岡藩御用達書簡』、『長崎ニ而唐人方申出候唐国兵乱之一條 甲比丹方申出候一條（安政四年） 葉種其外蘭船持渡品書』（東京大学史料編纂所 島津家文書11 12 6）にも収載されていて、長崎周辺の大名に情報が伝わっていたことがわかる。
- 17 風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』（吉川弘文館、2019年）460頁。松方冬子編『別段風説書が語る19世紀 翻訳と研究』（東京大学出版会、2012年）287頁。
- 18 松浦章「『遐邇貫珍』と幕末に伝えられた太平洋国情報」『海外情報からみる東アジア』（清文堂、2009年）464～465頁。
- 19 前掲風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』483頁。前掲松方冬子編『別段風説書が語る19世紀 翻訳と研究』311頁。
- 20 『大日本古文書 幕末外国関係文書之十五』（東京帝国大学、1922年）581頁。
- 21 前掲風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』、501頁。前掲松方冬子編『別段風説書が語る19世紀 翻訳と研究』、330頁。
- 22 午八月付午壱番船主 程稼堂・楊少奮「唐国騒乱風説書」（「風説袋」長崎歴史文化博物館収蔵、青方14 1 4）。
- 23 「唐国賊乱ニ付避難の畧記」（長崎歴史文化博物館収蔵、13 655）。「申六月」の同文が「文久元年清国賊乱ニ付開書和解」（長崎歴史文化博物館収蔵、13 651）にある。
- 24 松浦章「ジャーディン・マセソン商会と日清貿易—文久元年一番ランシフィールト船の来航をめぐって—」（『海事史研究』〈第25号、1975年〉）。
- 25 琉球から島津家への（文久元）西5月付の知らせには、「殊ニ藩州表ハ去年四月ヨリ長毛賊数多攻入、城内悉焼尽死人數万人、壯年ノ者ハ西門ヨリ遁去、助命又ハ西湖ニ致溺死候者モ余多有之、到六月ハ長毛賊城内へ相住居嚴相守、到当分ハ外城數百里築席暴虎ノ挙動共有之由ニ候得ハ、以前御買物相調候商人共、存亡ノ程モ不相知」（『鹿児島県史料忠義公史料 第一巻』〈鹿児島県、1974年〉370頁）とある。『バタヒヤ新聞』にも、「文久元年辛酉八月十四日なり、「南京の一揆に就て種々の風説あれ共、上海・寧波辺にて恣に奪掠を為すと云ふ説のみは實なる可し」とあって江戸でも状況は知られて
- いた（明治文化研究会編『幕末明治新聞全集2』（大誠堂、1934年）23頁）。
- 26 『続通信全覽・類輯之部』13、雄松堂出版、1985年、665～666頁。前掲松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』、第六編第三章。
- 27 「長崎奉行伺之留」（『外務省記七坤』国立公文書館蔵）。菱谷武平「唐館の解体と変質—新しい居留地の形成—」（『長崎談叢』第59輯、1976年）。
- 28 前掲『幕末明治新聞全集2』90頁。
- 29 鶴田武良「陳逸舟と陳子逸—來船畫人研究四—」（『國華』1044號、1981年）。同「王克と徐雨亭—來船畫人研究六—」（『國華』（1070號、1984年）。
- 30 松浦章「ジャーディン・マセソン商会と日清貿易—文久元年一番ランシフィールト船の来航をめぐって—」（『海事史研究』第25号、1975年）。同「長崎唐船主から長崎華商へ」（『関西大学文学論集』〈第56巻第1号、2006年〉）。それぞれ、のちに前掲同「江戸時代唐船による日中文化交流」に所収。
- 31 「亥正月廿八日報告〔風説書〕」『鹿児島県史料玉里島津家史料補遺南部弥八郎報告書一』（鹿児島県、2002年）111～118頁。
- 32 上原兼善『近世琉球貿易史の研究』（岩田書院、2016年）409～419頁、466頁。
- 33 『薩藩海軍史 上』（原書房、1968年）184～192頁。
- 34 『長崎県史 対外交渉編』（吉川弘文館、1985年）876～878頁。
- 35 前掲「長崎唐船主から長崎華商へ」。
- 36 なお、文久3年後半には、長崎も平和を取り戻して貿易も回復傾向にあったようであるが、『日本交易新聞』第三八号文久3年12月19日神奈川開判によると（明治文化研究会編『幕末明治新聞全集1』（大誠堂、1934年）125・126頁）、「長崎ハ当時平穩にて交易も稍々復古の姿を顕せり、但し重立ちたる輸出の物品ハ彼地に於ても亦横濱と同く唯生綿のミ。』、『日本貿易新聞』第43号には、「政府は此港（横濱）を鎖さんか為に當港を甚しく衰微せしめ、却て長崎を繁昌に趣かしむ、是全く此港（横濱）の貿易を彼地（長崎）に移転せしめんか為也。」（同135頁）とある。こうした点が唐人社会も同様であったのか、この点は検討すべき課題だと考えている。

#### 〔附記〕

本研究は JSPS 科研費 18K00970、JSPS 科研費 23H00012 による成果の一部である。本稿は、中野等編『中近世九州・西国史研究』（吉川弘文館、2024年）の第三部第三章の拙稿と関係する内容であることから、そちらも参照されたい。